

# スポーツ指導に身体接触は必要か？

## 女性選手を対象としたスポーツ指導現場に着目して

○権野めぐみ<sup>1</sup> 伊藤将史<sup>2</sup> 橋元真央<sup>3</sup> (非会員) 越智淳子<sup>4</sup> 来田宣幸<sup>5</sup>  
(<sup>1</sup>名古屋葵大学 <sup>2</sup>近江兄弟社高等学校 <sup>3</sup>大阪教育大学 <sup>4</sup>佛教大学 <sup>5</sup>京都工芸繊維大学)

キーワード：ハラスメント、倫理観、科学的根拠

### 【スポーツ指導における身体接触の現状と課題】

スポーツ指導では、動作のデモンストレーションや声かけが基本的な手法とされる一方で、必要に応じて身体接触を伴う指導も行われてきた。身体接触は、姿勢の修正や運動感覚の促進に寄与する側面があり、頻繁に使用されており、これまで経験的に支持されてきた。このように、スポーツ指導者や選手は経験や伝統に基づいて身体を触る指導法を受け入れてきたといえる。

しかし、近年、諸外国ではハラスメントや子どもの権利保護の観点から、身体接触を伴う指導の是非について倫理的な議論が展開されている。例えばクラシックバレエ関係では、2010年頃から欧米の一部のバレエ学校において、「ダンスにおける適切な身体接触に関する方針」が策定されている

(The Royal Ballet School, 2015)。そこでは、「身体を触る指導法が不可欠」であると明記されつつも、「最小限に留めること」、「事前に選手の同意を得ること」を求めている。しかし、「最小限」という表現は抽象的であり、具体的な基準が不明確である。また、身体接触の効果や選手の反応についての科学的な検証も不足している。

### 【社会的な価値観の変化と身体接触に対する不快感】

一方、一般社会においては、不要な身体接触や意に反する身体接触はセクシュアルハラスメントに該当し、厳しく避けられるべきものとされている。大森ほか(2013)の調査では、日本の大学生が身体を触られることに対して不快感を抱くことが示されており、特に女性においてその傾向が強いとされている。さらに、この不快感は、相手の性別、関係性の親密度、触られる身体部位、日常生活での身体接触の経験によって異なるとされている。

このように、スポーツ現場と一般社会では身体接触に対する価値観や倫理観に大きな隔たりが存在している。日本のスポーツ指導の現場では、「熱心な指導」、「技術の習得」、「信頼関係の構築」などといった文脈のもとで身体接触が東漸されることも少なくなかった。こうした文化的背景を考慮しつつも、国際的な倫理基準や人権意識に基づくと、今後、日本のスポーツ指導現場においても、身体接触に関するガイドラインを策定することは必要と考えられる。

そのためには、競技種目や指導場面、選手の年齢や性別といった多様な要因に応じた「適切な身体接触」のあり方を明らかにする必要がある。特に、身体接触に対する受け取り方を指導者と選手の両方の視点から検討し、相互理解を深めることが持続可能なスポーツ環境の構築には求められる。

スポーツ指導と一般社会において相反する可能性のある価値観が存在する可能性を踏まえ、その両者の共生をめざし、スポーツ指導における「必要最小限の身体接触」の着地点を探ることは独自の視点であり、また、欧米で策定されたガイドラインを参照しつつ、日本の文化的背景や教育現場の実情に適した適切な指導法を模索する意義は高いと考えられる。

### 【調査結果からみえるスポーツ現場での身体接触に対する不快感の実態】

女子大学に通う学生175名(全員女性)を対象として、スポーツ場面における身体接触に対する不快感についての調査を実施した。対象者に対しては、接触者との関係性(親しい

友人、親しくない友人、教員)および相手の性別(女性、男性)を条件として、身体11部位(手、腕、背中、首・肩、頭、脚・足、腰、顔、お腹、お尻、胸)への接触に対して不快と感じるかたずねた。

その結果、女性(同性)による身体接触では、親しくない友人や教員における胸部や臀部など一部の部位では5割前後に達するものの、多くの部位で不快と感じる割合は5割を下回っていた。一方で、男性(異性)による身体接触では、親しくない友人や教員において、ほぼすべての部位で不快と感じる割合が5割を超えていた。親しい友人であったとしても、胸、お尻、お腹、腰といった体幹部では8割以上が「不快」と回答しており、相手との関係性が近くても、不快と感じる部位があることが明らかとなった。

この調査結果は、身体接触の受容性は、接触者の性別、関係性の親密さ、接触部位によって大きく左右されることを示している。特に、女性選手を対象とする現場では、男性指導者や男性トレーナーによる身体接触が、意図せずして強い不快感や心理的負担を与える可能性があることに十分配慮する必要がある。実際、近年報道されているように、男性指導者およびトレーナーによる女性選手に対するハラスメント事例も少なくない。

### 【倫理的なスポーツ指導を考える対話の場へ】

そこで、本企画では女子学生や女性アスリートに関わる現場で活動・活躍されている先生方を話題提供者として迎え、スポーツ指導を中心として、「身体に触れる」ことに対する認識や実態を共有することを目的としたワークショップを開催する。登壇者はそれぞれ、高校女子運動部活動、審美系統技種目、リハビリテーションという異なる分野において、長年、女性に関わる実践を続けてきた立場であり、視点の多様性と現場感のある観点から議論したい。

また、最終ディスカッションではフロアの方も交え「身体接触はスポーツ指導にとって本当に不可欠か」、「スポーツ指導における身体接触はどのように行われるべきか」といったテーマについて、多様な視点で議論を深めていきたい。現場の経験と心理学の知見を結びつけながら、実践的かつ倫理的なスポーツ指導のあり方を共に考える場としたい。

### 【登壇者】

企画者：権野めぐみ

司会：来田宣幸

話題提供者：伊藤将史(高校女子バレーボール部顧問)、橋元真央(新体操指導者)、越智敦子(理学療法士)。

### 【利益相反】特になし。

### 【引用文献】

大森馨子・五十嵐由夏・齋藤慶典・和氣洋美・巖島行雄  
(2013)「触られる」ことは心地よいのか? (3) 日常生活における身体接触頻度からの検討. 日本心理学会大会発表論文集 (pp. 1EV-029) .

The Royal Ballet School (2015) Policy on Appropriate Physical Contact in Dance.

(ごんのめぐみ・いとうまさし・はしもとまお・おちじゅんこ・きだのりゆき)